忘れ物

守山みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
忘れ物

【Ｎコード】
Ｎ９１２１Ｙ

【作者名】
守山みかん

【あらすじ】
１４歳の息子にプレゼントでもらった雨傘を市役所に忘れてしまった私は、さっそく市役所に取りに戻るが、そこで予想外の出来事に遇う

もう心当たりは、ここしかない。
そう思って、K市役所の通用門をくぐり、まずは出入口付近に設置してある傘立てを覗いてみたが、見当たらない。
次に、3階の都市計画課だ。
用事があって立ち寄ったのは、この窓口だけだ。
窓口に近付くと、先ほど応対してくれた男性担当員が、再び現れる。
「いらっしゃいませ」
担当員は、2時間ほど前に会っているにも関わらず、初めて会うような余所余所しい素振りで話しかけてくる。
「先ほど、ここへ伺った者ですが、傘を失くしてしまいました。もしかして、ここに忘れていませんでしたか？」
「ああ」
と、担当員は途端に顔馴染みの表情に変わり、
「窓の外を見て、雨が上がったとか、話してましたよね」
担当員の視線が、先ほど対話に使用した応接コーナーに向けられる。
私が座っていた側からは、大きな窓を通して、隣の都市公園の様子がはっきり見える。
確かにそうだった。
私は窓の外を見て、そこで雨が上がったのを確認している。
「どんな傘でしたか？」
と、担当員が訊ねてくる。
「紺とベージュと黒の切り替えになっている傘です」
と、私は答えながら、滲み出てくる傘への愛着と喪失感を噛み締める。
父の日のプレゼントとして、14歳になる息子が、貯めた小遣いで買ってくれた雨傘だ。
以前、近所のショッピングセンターに行った時に設置してあった「

写真シール機」で作成した、妻と息子の三人が写ったシールが柄の部分に貼ってある。
都合良く雨が降り、さっそく役に立つと喜んでいたのに、よりによって、プレゼントしてもらった翌日に無くしてしまうとは。
担当員が、そばを通りかかった女性事務員に話しかける。
事務員は立ち止まり、私に会釈をする。
「傘の忘れ物はありませんでしたか？」
「ありましたよ。そこの、応接コーナーの床に置いてありました」
と、私が使用していたテーブルを指差す。
間違いないと確信する。
「1階の総合案内所で、忘れ物を取り扱っています。そちらで確認していただけますか」
と、事務員は会釈を交えながら、階段の方へ手招きする。
私は、そそくさと階段を駆け下りる。
総合案内所には、女性案内員がカウンター越しに腰を落ち着けている。
「はい」
と、案内員は、私が問いかけるより早く話しかけてくる。
「先程、都市計画課で傘を忘れていったのです。こちらで預かっていると伺ったものですから」
「お待ち下さいませ」
案内員は、背後の扉を開け、事務室に入っていくが、すぐに戻ってくる。
「お入り下さいませ」
と、案内員は事務室に入るよう、扉を大きめに開ける。
私は、会釈をして、入室する。
「こちらのかたです」
と、案内員は年配の男性係員に声をかけ、持ち場に戻る。
係員は、傘を持って私に近付き、私と目が合った瞬間、驚いたような表情を見せる。

「おや、あなたは…」
と、係員が言う。
私は、以前にこの係員と面識があったかどうかを思い出してみるが、心当たりはない。
だいいち、K市役所に来たのは、今日が初めてである。
私に全くゆかりの無いこの市役所を訪れた理由は、単に仕事の繋がりでしかない。
「こちらが、そうでしょうか」
と、係員が傘を私に見せる。
紺とベージュと黒の切り替え、それに家族三人の写真シール。
間違いなく、私の傘である。
「ありがとうございます」
私は傘を受け取り、力強く握り締める。
「あの…」
と、係員がまだ何か言いたげに、私に話しかけてくる。
「少しお待ちいただいてよろしいですか？」
係員はそう言い残して、事務室の奥の扉の向こう側へ行ってしまった。
5分ほどした後に、係員が戻ってくる。
何やら折畳傘を大事そうに両手で持っている。
「もしかしたら、これもあなたのものではありませんか？」
と、係員は訊ねる。
私は、折畳傘を手に取り、柄の辺りに貼られている写真シールを見て、「あっ」と声を上げた。
まだ幼い息子を中心に、少しだけ若く見える私と妻がニッコリ笑って、ピース・サインをこちらに向けている。
もちろん、見覚えのある構図だ。
今から11年前、息子は3歳だった。
当時、勤めていた会社が倒産し、随分と家族に苦労をかけたものだ。
この傘は、転職に成功した私への、妻の贈り物だった。

ところが、歯医者に行った時、土砂降りの中を使用して濡れていたので、傘立ての脇に、軽く畳んで置いていたのを、あっさりと盗まれてしまったのだ。
もらって、まだ一週間も経っていなかった。
あの時の、落胆は今でも心に刻まれている。
妻は、「気にすること無いよ」と言ってくれたが、妻自身もがっかりしていた様子は忘れられなかった。
それが、まさか、私が訪れたことのない市役所で、しかも１１年も経過した後に見付かるとは、夢にも思わなかった。
「わ…私のものです」
私は、声を震わせながら言った。
係員は、「良かった」と言って、満面に笑顔を浮かべる。
「なぜ、こんな所に…この傘は、１１年前に盗まれたものなんです」
「市内にお住まいではないのですね」
「ええ。ここに来るのは初めてなんです。たまたま仕事の関係で、ここに来たんです」
「じゃ、ドロボウした人が、この市内に住んでいるのですね」
係員は、愉快そうに笑う。
私もつられて笑う。
「きっと、縁なんでしょうね」
と、係員は言う。
「たぶん１１年くらい前だと思うんですけど、その傘が正面入口の傘立て付近に放置されているのを見付けましてね。忘れ物の管理は、本来の規定ならば、１ヶ月経過しても持ち主が現れない場合は処分する事になっているんです。でも、その小さく写ってる男の子の笑顔が、すごく可愛く思いましてね。それに、まだ新品のようでしたし、何だか捨てられなくなってしまいまして。そこで、私の独断で、私のロッカーの中に仕舞っておいたのですよ。小さな折畳傘を入れておくくらいは、どうって事はありませんでしたから。時々、広げたりして具合を見たりとかしていたんですよ。でも、１１年も経っ

てしまったんですね。実は、私事ですが、来月で定年を迎えることになりまして。名残惜しいのですが、そろそろロッカーの中も整理しようかと思っていたんです。そこへ、突然、写真によく似た人が私の前に現れて…もう、私もビックリしましたよ」
私は、係員にお礼を言い、深々と頭を下げた。
「いえいえ。探し物が見つかって良かったですね」
と、係員は照れくさそうに言い、どこか淋しそうな笑顔を見せる。
１１年経っても、写真はそれほど褪せておらず、私も妻も若々しく見える。
私は、二度と離すまいと、傘を握る手に力を込めた。

（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9121y/

忘れ物

2011年11月27日11時56分発行